



ボクシングを極める、人間の友愛。

杉浦大介 スポーライター

『ボディ&ソウル ある社会学者のボクシング・エスノグラフィー』

ロイック・ヴァカン 著 田中研之輔/倉島 哲/石岡丈昇 訳 新曜社 ¥4,515

日本人が実感するのは難しいかもしれないが、スポーツが貧困を脱するほぼ唯一の手段という地域はいまでも存在する。本書はそんな、いわゆる、ハングリー・スポーツの代表格であるボクシングの世界に飛び込んでいったフランス人社会学者のレポート。「人体実験と社会学的報告」と回りくどく表現されているが、簡単にいえば3年半にわたる著者のボクシングジム体験&考察記である。

1988年8月、ゲッターの人々とその生活を調査する拠点を探していた著者は、シカゴのウッドローンと呼ばれる貧困地区にあるジムを訪れる。当時20代後半だった著者は、研究を進めるうちに当初の目的を越えた部分でボクシングに魅せられ、ジムの仲間たちに感化されていく。

本書は3部構成で、「ストリートとリング」と題した第1章ではゲッターとボクサー、ジムの関係を解説。第2章以降では試合日の様子などがドキュメント的に綴られ、最終章ではアマボクサーとして成長した著者自身がシカゴのゴールデン・グロブ大会に出場する姿が描かれている。その過程でゲッターにとつてのボクシングの意味だけでなく、ボクサーたちのルーティン、練習方法、興行の仕組みなどがわかりやすく提示されている。

著者は本書でたびたび、ボクシングを「男のアート」と記した。アメリカでアマボクサーとして試合に出場した経験をもつ私にも体感的に理解できるが、ジムにはほぼ例外なく、この「男のアート」を極めたいと思う人間同士のシンプルな友愛がある。「ボディ&ソウル」の最大の魅力も、フランス人の学者がジムの仲間たちと徐々に、人種、国籍を越えた友情を育んでいく過程にある。本書に登場するボクサーたちへの、感情移入を禁じ得ない。読み終わる頃には、ジムに通いたくなる読者も多いのではないかな。

小さな嘘の裏側には、
秘かに傷ついた心があった。

『夏の嘘』

世界的ベストセラー『朗読者』の著者による7つの物語を収めた短編集。シーズンオフのリゾート地で出会った女が、多額の財産を相続していることを後で知って戸惑う男。どんどん成功していく物書きの妻を、懸命に自分の庇護下に置こうとする売れない物書きの夫。誰もがいつもどこかで少しだけ傷ついている。かつての恋人に会いにいき、自分自身を欺き続けてきたことに気付く老女は、心の傷を50年近くもて余している。著者は、そんな小さいのに、なかなか癒えない傷を優しくなぞるように書いていく。適度な湿り気も悪くない。



ベルンハルト・シュリンク 著
松永美穂 訳
新潮社 ¥2,100

急激なデジタル技術の進化は、
人から仕事を奪うだけか？

『機械との競争』

18世紀に始まった産業革命は、生活の質の向上と同時に雇用の拡大をもたらした。ところがIT革命は、人間から仕事を奪っている。米MITの研究チームは、デジタル技術の革新が経済に及ぼす影響をリサーチ。最初に気付かされるのは、技術革新のスピードが人間の想像をはるかに上回っていたことだ。人間はそれに対応できていない。だがデジタル・オプティミストと称する著者は、しだいに技術革新の成果を分け合えるようになるはずだと説く。クライスラービルを思わせるシャープな表紙が目を通く本書で、その鍵を見つけてほしい。



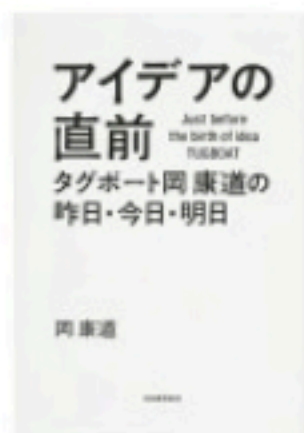
エリック・プリニョルフソン/
アンドリュー・マカフィー 著
村井章子 訳
日経BP社 ¥1,680

広告の最前線をいく男の、
他愛ない日々のお話面白い。

『アイデアの直前』

タグポート 同 康道の昨日・今日・明日

「日常はアイデアを見つめることにほとんどの時間を費やす」と語る、トップ・クリエイターによるエッセイ。生々しいCM制作現場にも興味は湧くが、他愛ない日々の思考回路が面白い。40歳以上のシニアアメリカンフットボールチームの結成、あつけない引退。いまだから語れる会社を辞めた理由。出世できなかった時の身の振り方の考察。投資で儲ける人たちのことを「お金オタク」と呼ぶ著者の金銭感覚。「カッコいい」かどうかにかかわる著者の審美眼が、磨かれている様子が伝わってくる。



同 康道 著
河出書房新社
¥1,680